静私幼だより

- 海外研修報告
- 雑学の窓/「安心基地」の確立と確認作業・座光寺 明
- 次世代リーダー養成研修会
- 特集「今、改めて砂場を捉え直す（その1）」箕輪潤子
- コミュニティ（保育の窓）
- もの想い（双葉幼稚園・富士宮聖母幼稚園）
- 街ぶらり（熱海市）
- 健康随想/吉野友勝
- 広報委員回想録
- 1年間のナイスショット特集

こどもが まんなか PROJECT
只今全国展開中

NO.182
2018 3
Spring

平成29年度　海外研修報告

期間■平成29年9月2日（土）～9月19日（火）18日間
場所■スウェーデン王国
スコーネ県ヘルシンボリ市

■視察目的
スウェーデンは1996年より保育所の所管を教育省に移管する等「教育」を基盤に幼保一元化が図られ、子育ての制度も幼児教育に対する考え方も先進国と言える。また、自然の環境を活かして行う教育の質の高さは、世界的に注目されている。実際にそこに携わる方々とのディスカッションや保育現場で子ども達と関わることで、教師の考え方や環境構成によって子ども達はどのように育っているかを学ぶ。

■研修生
田村 都弥　学校法人アソカ学園 追分幼稚園
大石 竜士　学校法人大石学園 静岡聖光幼稚園

ヘルシンボリ市の幼児教育の特色と内容

スウェーデンでは教育の地方分権化が進んでおり、幼児教育も国の教育要領（カリキュラム）が基本になるが、地域の裁量が非常に大きい。私達が視察したヘルシンボリ市は、国内でも幼児教育で一番高い評価を受けている。市では、2035年に向けてのビジョンとして『ワクワク』『創造』『グローバルバランス』という3つのキーワードで、一丸となって取り組んでいる姿があった。

『ワクワク』の取り組み

市は、子ども達の意見を真剣に取り入れようと考えている。例えば、森の中で「ここに虫のマンションがあったらいいなぁ」「大きなコウモリがいたらいいなぁ」という子どもの声を市の職員が取り入れて、実際にその場所に作ってしまう。また、市の地図を使って「どこにどんな公園があると良いか」など都市計画も子ども達からのアイデアを聞き入れている。子ども達は自分達のアイデアや話し合った事が、実際に取り入れられて街が変化していくのを見て、自分達が影響を与えていることを体感する。市はこのようにして、子どもが積極的に市の環境や自然に対して興味を持ち、考えて行動出来るように配慮している。子どもにとってこのような経験は、自信を持って自分の意見を発表する事、責任や協力分担の大切さを知る事、次への活動や新しい発想を浮かべる勇気につながっている。

『創造』の取り組み

各プレスクールに必ずイマジネーションルーム（プロジェクターを利用した幻想的な部屋）、アトリエルーム（絵を描く専用の部屋と道具）、立体で何かを作るスペース等がある。いつでもしたいことをその場所で集中して行う事が出来る環境を設けることで、子ども達は好きなタイミングで思い思いに自分のクリエイティブな発想を実現していた。また、自然物などの現物を観察したり、利用したり、工夫したりする道具としてタブレットを利用して様々な発想を促している。タブレット等も市が子どもの活動を考え、ねらいをもって整備されるように補助している。

『グローバルバランス』の取り組み

自然のサイクルを大切に考え、「人間はどのように関わって行くべきか」、「移民の言葉や文化を大切にして、一緒に暮らしていくにはどうすべきか」、様々な事柄に『持続可能な環境』（※）とはどういうものかということを子ども達が意識できるように考えている。

※持続可能な環境：地球温暖化や天然資源の枯渇、自然破壊等が心配される大量消費型の経済社会ではなく、リサイクル等の工夫をして自然が許容できる範囲を考え、人類が将来もずっと生存していける環境。

野外活動

ヘーガステンプレスクールは、54人の子ども達が3グループに分かれて生活している。その中の一つが「アドベンチャーグループ」と呼ばれ、野外での活動に重点を置いている。9月5日・6日はヘーガステンプレスクールの子どもたちと野外活動に参加した。（4歳児12人・教師3人・研修生2人）それぞれ違う場所へ出掛けた。

5日はプレスクールから歩いて15分くらいにある近くの草原に行った。入り口からラズベリーが自生しており、子ども達は慣れた手つきでつまみ食いしながら、みんなで採集していた。その後、教員が子ども達を呼んで輪になった。その輪の中心には毒キノコがあり、枝を使って掘り出し、みんなに見せながら子ども達に問いながら意見を引き出していた。触ってはいけない事を確認した後、持参したイラストを1枚ずつ良いことと悪いことを選別してカードを置いていった。1人につき1枚のカードを担当し、意見を求めながら、自然の

中であそぶルールや安全についてみんなで確認し合っていた。草原の中でのランチの後に、絵本を読んだり、木登りをしたり、おやつをたべたりして、夕方までそこで過ごした。木登りや丸太渡りについて話を聞くと、「木登りでも、丸太渡りでも、自分でできる可能性が広がるように特別な手助けはしない。多少の危険を知りながら、自分で判断できるようになっていくことが大切だ」と教えてくれた。

6日は車で30分くらいの丘の上にあるドリームフォレストに同じメンバーで参加した。そこは森の中ではあるが、木のチップで出来た細い道が整備されて非常に散策しやすい環境であった。子ども達が作った秘密基地や小さな崖があり、1日中楽しめる場所だった。ドングリや木の実や葉、自生しているキノコ等を採取した。ランチの後に、緑の

草に白い枠を額縁に見立ててその中にそれらを並べてステキな作品を作り楽しんでいた。また、それを子ども達がタブレットを利用して写真に残していた。おやつの時間にはパンケーキを焼いて食べたが、ガスバーナーとカートリッジをつなぐ準備段階から調理の方法や消火布の使用方法までなるべくわかりやすいように子ども達に説明していた。子どもだから

わからないだろうという扱いではなく、真剣に伝えていた。自然を生きた教材として活用することが実践されており、それによって子ども達がとても真剣な表情で話に聞き入っている様子は、まさに主体性をもとに学びや成長に繋げていた場面だった。

《視察を振り返って》

●「セルフエスティーム（自尊心）と社会とのつながり」～自立へ～①

スウェーデンでは、小さい時から1人の人間として扱う事で、自立へと導いている。例えば野外活動のパンケーキ場面でも、出来上がったものだけを見せてお客さん扱いするのではなく、共同で生活する仲間として扱ってもらえている事を感じ、社会とのつながりやセルフエスティームを育てていた。また、食べて消費だけでなく、すべてを見せることで「持続可能な環境」を意識し、子ども達の未来への責任感が生まれるような働きかけにもつながっている。

●「権利と義務」～自立へ～②

スウェーデンでは、小さい時から自分で選択して、義務を果たすことを意識して教えている。自分があそぶ部屋を選択する事（権利）から始まり、部屋にあるプレスクールの地図に自分の所在を知らせる写真を置く。違う場所に移動したくなったら、片づけをしてから（義務）写真を地図から移動させる。野外活動でも、自然物を持ち帰る際に「これは持ち帰る必要があるかないか」を判断させる場面を何度か見た。

●「愛情のハグと移動の抱っこ」～自立へ～③

スウェーデンの保護者は、送迎時には愛情たっぷりのハグをしているが、それ以外では手をつないで、子どもを歩かせている。日本では子どもを抱っこして移動して、愛情のハグと抱っこ移動が混同しているような場面も多々あるように感じる。

《まとめ》

今回お世話になったヘルシンボリ市は、私達を迎えるにあたり、かなり力を入れて準備してくれていたと感じた。はじめの教育センターでのレクチャーから最後のミーティングまで、きちんと段階を踏みながら様々なものを包み隠さず紹介してくれた。そして、何より現地の人たちの人柄や温かさに感動した。幼児教育に関しても温かみがある考え方で人柄が出ていると感じた。日本の問題である「子どものセルフエスティームの低さ」「消費社会」に対して大きなヒントがあった。このようなことに関して、幼児教育の世界だけでなく社会全体でも考えていけるように今回学んだことを発信していきたいと感じた。

「安心基地」の確立と確認作業

認定こども園 龍の子幼稚園
座光寺 明
（ざこうじあきら）

待機児童問題の解消に目途が立ちません。保育所をいくら作っても追いつかず、無認可施設を自治体の認証保育所として推奨し、さらには小規模保育所・企業内保育所がどんどん新設されています。政府・行政は、働く母親を増やすことだけに目がいって子どもの立場や気持ちを考えていないように感じます。

赤ちゃんは弱視・難聴で産まれてきます。機能が未成熟なためですが、これには意味があると思います。弱視なので全神経を集中して見ようとしなければ物を見ることができません。自分を産んでくれた母親の顔を真剣に見ようと努力します。しかし残念なことに80～90％の母親は授乳中もスマホや携帯を操作しているそうです。おっぱいを飲んでいる時は、赤ちゃんにとって至福の時です。そんな時に母親の顔を見て「大好きなママ」を確認したいのです。目を見て「おいしいですか？いっぱい飲んでくださいね」と言葉をかけるべきなのに、目を見ないどころか横顔しか見ることができません。

また赤ちゃんは難聴なので全神経を集中させて母親の声を聞こうとしています。しかし母親の赤ちゃんへの声掛けは著しく少なくなっています。布オムツを使用していれば、おしっこが出て濡れて泣けば、「気持ち悪かったですね」とすぐにかけつけ、「きれいきれいしましょうね」とオムツを交換し、「これで気持ち良くなりましたね」と声をかけます。紙オムツが普及し、赤ちゃんへの母親の声掛けが激減しました。さらに家の中にはテレビ・DVD・CD・スマホと機械音が氾濫しています。肉声で声掛けしても機械音が同時に流れていれば、機械音の方が赤ちゃんの耳に入り、肉声はかき消されてしまいます。

赤ちゃんの時にしっかり抱っこをして、目を見て声かけをしていれば、この人が自分にとって一番大切な人、この人こそ自分にとっての「安心基地」という考えが確立します。安心基地ができた瞬間に起こることがあります。それが人見知りです。人見知りと恥ずかしがり屋、照れ屋とは別物です。恥ずかしがり屋は性格なので何歳になっても変わらないことがありますが、人見知りは乳幼児期の一過性のものです。人見知りとは、それまで父親でも、祖父母でも、関わってくれれば喜んでいたのに、母親以外の人が接すると大泣きをします。ところが母親が抱っこした瞬間に泣き止みます。これが『人見知り』で『母親＝安心基地』となった証拠です。現在は「人見知りが無かった」「人見知りが弱い」子どもが急増中です。つまり母親との愛着関係が弱いということです。

安心基地ができた後、1～2歳でイヤイヤ期（第1反抗期）が起こります。「お片付けしよう？」「イヤ！」「ごはん食べよう？」「イヤ!!」のように、今まで良い子だったのに突然、「イヤ！」が始まり驚きます。これは赤ちゃんの時に母親を安心基地としましたが、ほんの少しだけ知識と経験を経た上で「本当に安心基地なのか」の確認作業をしているのです。だから「そうだよね。まだ遊びたかったよね」などと抱っこしていっぱいと子どもの気持ちに同意・共感してあげることが大切です。そして心が落ち着いたなら「でもね、もうお片付けしないとお出かけできないよ」と優しく諭してあげれば「やっぱりママは安心基地だ」と安心と確認ができます。

これらの関わりを十分した上で幼稚園という集団に入れば、心が満たされているので、お友達との関わりも先生のお話も楽しく聞くことができます。

安心基地もできないで、確認作業もそこそこに、集団に入れることの怖さは幼稚園関係者なら皆さん感じていることだと思います。就労支援だけになっている行政関係者に、そして母親に、乳児～幼児期の母親の関わりの大切さを訴えていくことは幼稚園の責務と思っています。

（参考）
今回書いてくださった内容は、座光寺先生が「ぱっとわかって必ず役に立つ99のアドバイス」子育て相談の内容をQ＆Aでまとめた本『子育て99（救急）ハンドブック』《さくら社》を刊行された中に掲載されています。

次世代リーダー　養成研修会

1月17日（水）に平成29年度第2回次世代リーダー養成研修会が、富士市の認定こども園富士ふたば幼稚園を会場にお借りして行われました。当日は朝から雨が降りあいにくのお天気でしたが、28名の受講者が参加し、10時～14時30分まで充実した研修会を行うことが出来ました。

まず、開講式では主催者挨拶として武藤啓央経営委員会委員長より、今回の研修会を良い意見交換の場とし、今後の各園の幼児教育の発展・スキルアップに生かしてほしいとのお話がありました。その後会場園の今村雄一郎園長より27年度にこども園を開設し3年経ち、今では移行して良い方向に向いていると挨拶をいただきました。研修会は施設見学・昼食・座談会・質疑応答の順に進められました。

施設見学は、受講者・経営委員会の委員を4グループに分け30分から1時間かけ、会場園の先生方に園内を丁寧に説明していただきながら行われました。富士ふたば幼稚園さんは、増築をしながら敷地の中にA棟からI棟までの9つの建物が建っており、初めて園を訪れた受講者達には迷路の様に感じられたことと思います。9つの建物の中には、園児たちが絵本などを借りに行く「ふたば文庫」という棟や、お部屋や廊下の形がユニークな年少棟・4階に園児達の絵を飾るギャラリーがある棟・スタイリッシュなタイル張りの壁が素敵な調理室やランチルームがある棟などがあり、実にバラエティに富んだ園舎でした。トイレや手洗いが至る所にあり、また、エレベーター・落下防止用の柵などが設置され園児にとってとても過ごしやすい園であることが分かりました。一番

驚いたのは、園内に陶芸の窯があることでした。今年は年長さんが作品を作っているということでした。グループ毎の見学のあとは各自自由に見学することができ、乳児（1歳・2歳）の昼食風景なども見る事が出来ました。みんな白いご飯が大好きでモリモリ山盛りのご飯を食べていました。

3種類の駅弁（竹取・巻狩・溶岩焼）の昼食の後は、『認定こども園の開園と経営について～この2年を振り返って～』という題で座談会を行い、今村先生より1時間ほどお話をいただきました。認定こども園富士ふたば幼稚園は昭和26年に開園し、「子どもと親と教師がともに育つ」という60年余の伝統と、「感性を育む幼児教育」という教育理念のもと保育を行っており、絵画・造形・音楽活動に力を入れているとのことでした。幼児・乳児合わせて16クラス348名の園児と47名の教職員がいる大きな園です。今までは一斉活動が多かったそうですが、子ども達が主体的に取り組むということに重点を置き現在保育内容を変えている最中だというお話がありました。こども園に移行して3年目ですが、準備段階から園の教職員が協力的でそのことが現在の良い運営の一番

秘訣だとのことです。今村先生がこども園化に踏み切った大きな理由は、保護者が働いていても今まで通り幼稚園に通うことができる・兄弟で違う園に通わなくても良いなどを挙げられていました。しかし、今までの幼稚園の理念を守りこども園だからといって、むやみに便利な園にはならない・なんでもかんでもサービスはしないということを最初に考えられたそうです。そうして開園して2年を振り返って良かったこととして、乳児保育に取り組むことで子どもの育ちの理解（0歳～5歳）ができる・園児確保・職員配置の充実・市との連携・地域への貢献という点を挙げてくださいました。反対に大変な事として、乳児保育（給食など）・乳児の競争率が高い（入園する子を園で選考できない）・保育内容や行事の見直し・雑多な事務処理・市との連携という点を挙げてくださいました。またこれからの課題として、地域の子育て環境の充実（未就園児、子育て支援室の拡充）・新しい教育要領を踏まえた教職員の育成と研修の充実・雇用対策や働き方改革（勤務体制の多様化への対応）・園児数減への対応・他市との情報交換などがあるということです。

今回の研修会に参加して、こども園に移行するということは確かに様々な点で大変なこともあるかもしれませんが、子ども達や保護者、そして実際に働いている教職員にとっては良い点が多くあるということが分かりました。すでにこども園化をしている園、これから移行する園等様々あると思いますが、各園同じ私立幼稚園として連携を密にし、情報交換・意見交換をしながら進んでいく必要があると強く感じることができた研修会でした。

また、最後に今村先生が教職員に対して、『保育のプロとして意識し、ただの遊んでくれる優しい人ではなく保護者にも認められる保育の専門家になりなさい』と常に言い続けているとお話されていました。是非すべての先生達がこのことを頭に置き日々の保育に取り組んでほしいと思います。

特集1

今、改めて砂場を捉え直す

砂場における遊びの特徴

武蔵野大学
教育学部准教授
箕輪 潤子

専門は幼児教育学、保育学。
著書に『遊びがもっと魅力的になる３・４・５歳児の言葉がけ《砂場編》若手保育者の指導力アップ』（明治図書）等。
現在、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構において研究委員として、砂場における幼児の育ち」をテーマに研究を実施している。

子どもたちが砂場で遊ぶ姿というのは、どこの幼稚園でも見られることと思います。ロバート・フルガムの著書「人生で大切なことはすべて幼稚園の砂場で学んだ」にあるように、幼稚園の砂場で、子どもたちは日々様々な遊びを繰り広げ、多くの経験をしています。これから6回にわたり、砂場について、「どのような場所なのか」「どのような遊びが展開されているのか」「保育者の援助や環境をどのように考えたらよいのか」など、様々な観点から見ていきたいと思います。

子どもたちの遊びから始まり、広まっていった砂場

笠間（２００１）によると、砂場の原型は200年以上前のドイツにあるそうです。ドイツでは砂地が多く、砂で遊んでいる子どもを見て、砂が子どもにとってよいのではないかということで、保育にも取り入れられるようになりました。やがて、砂場が子どもの遊びに適しているということがアメリカに伝わり、急速な産業の発展と共に都市化が進む一方で貧困などが大きな問題になっていた中で、貧しい子どもたちのために遊び場をということでボストンに砂場が作られ、その後アメリカ全土に広まっていきました。

日本では、明治30年代以降、アメリカから幼児教育についての様々な情報が入る中で、砂場についても知られるようになり、幼稚園に設置されるようになりました。当時の子どもたちも砂場での遊びに夢中になっていたのでしょう。倉橋惣三も砂場で遊ぶ子どもの姿に着目していたようで、砂遊びを自然との接触という観点で捉えていたとのことです。その後、砂場で遊ぶ子どもの姿をみた保育者たちがその重要性に気づき、全国に広まっていったとのことです。歴史の視点から見でも、砂場は、子どもの傍にいる保育者が、子どもの遊びの充実を願って設置した遊び場だと言えるのではないでしょうか。

砂場が全国に広がっていくなかで、子どもにとって砂場が重要な保育環境であることが広く認知されていったのでしょう。１９５６年（昭和31年）の『幼稚園設置基準』でも、砂場の設置が義務付けられました。現在、日本における幼稚園に砂場があるのは、この設置基準があったからであると考えられます。しかし、２００８年（平成17年）に『幼稚園設置基準』が改正され、設置義務がなくなりました。近年では、砂場で保育所に至っては、駅型保育所や小規模保育所が増加し、砂場の設置どころか自園に園庭があることが難しい園も増えてきています。また、保育内容の多様化や保護者の要望、衛生・安全管理の観点から砂場で遊ぶ機会や時間が減少している園も出てきているようです。

子ども子育て支援新制度の施行、幼稚園教育要領や幼保連携型認定子ども園教育・保育要領の改訂、幼児教育の無償化など、幼児教育に関わる制度等が大きく変わるなか、子どもたちの育ちに必要な環境とはどのような環境なのかということが問われています。そのような状況にある今だからこそ、子どもの遊びの充実を願って設置された「砂場」について考えてみていただけたらと思います。

安心感や居場所感を感じやすい場所

砂場での遊びには様々な特徴があります。まず、砂場は子どもが安心感や安定感、居場所感を感じやすい場所だということです。砂場という空間そのものが、枠などで他の場所から区切られていることが多く、安心して遊びやすいと考えられます。何より、砂場に入った時の身体が少し沈み込む感覚や、手で砂に触れたときのさらさらした感触が心地よい事もあって、砂場に受け止められているかのような気持ちになる子どもは多いと思います。4月には保育者と砂場で遊ぶ3歳児の姿がよく見られますが、砂に触れるなかでの安心感と変化させるおもしろさを感じられるからかもしれません。幼稚園という新しい生活の場において、砂場は最初の安心できる居場所になりやすいように思います。

また、他の遊びに比べると、出入りが自由という特徴もあります。仲間入りの際に「入れて」「いいよ」というやりとりは他の遊びに比べると少ないようです。友達がしている遊びに必要なこと（例えば、水を汲む、白砂を集める）をすることでいつの間にか仲間に入っていたり、反対にいつの間にか遊びから抜けていたりということもよくみられます。出入りが比較的自由ということも、安心感を持ちやすい理由の一つかもしれません。

身体を動かし、身体で感じる場所

砂は「さらさら」水がまざれば「どろどろ」など、様々な感触を感じることができます。また、砂の固さや柔らかさ、冷たさや温かさを感じることもありますし、戸外なので季節により寒さや暖かさを感じることもあるでしょう。かなり前のことになりますが、冬の寒い日に幼稚園に伺い、砂場で子どもたちが遊んでいる様子を見せていただきました。その幼稚園の砂場には屋根があったのですが、子どもたちは屋根の影を避け陽のあたる場所に移動しながら遊んでいました。お日様に背を向け、暖かいところを選びながら遊ぶ子どもの賢さに驚くと共に、砂場にも四季が訪れるのだと感じました。

砂場では、様々な感覚を感じることができる他にも、様々な身体や手先の動きを必要とします。山や川などを作るときには、身体全体を使いますし、砂で作ったケーキに飾り付けをするときには手先を使います。さらに、道具の種類や大きさによっても身体や手先の動かし方は変わります。砂で様々なものを作ることができるようになるためには、どのように自分の身体を動かせば、自分のイメージしたように掘ることができるのか、イメージと身体の動きを合わせていくことが必要なのです。自分の身体と頭をたっぷり動かし、つないでいくことができる場所なのではないかと思います。

想像と思考をたくさん働かせる場所

砂は水分や力によって、色や形、質感が変化する素材です。その性質があるからこそ、山を作ったり穴を掘ったり、ままごとでケーキ屋ごはんを作ったりすることができます。自分のイメージした通りに変化させることができる側面がある一方で、崩れてしまうということもあります。一方で、崩れたとしても、再度やりなおすこともできます。試行錯誤や工夫をすることでもっと丈夫なものや大きいものを作る様子も見られ、何度も再挑戦ができる遊びでもあると言えるでしょう。

一人でも仲間とでもいられる場所

一人でも仲間とでも遊ぶことができるのも砂場での遊びの特徴と言えるでしょう。砂場で遊んでいる子どもを見ていると、一人でもくもくと砂とかかわっている子もいれば、数人でダイナミックに遊びを展開している子もいます。ある幼稚園から送っていただいた砂場遊びの映像には、3歳児が一人で「さとうをいれて♪さとうをまぜて♪ちゃんとまぜたら・・・で・き・あ・が・りー」と自作（？）の鼻歌を歌いながら、砂をフライパンに入れたり混ぜたりしている姿が映っていました。砂という素材を使い自分のイメージを広げていくその子の様子からは、砂を変化させる中で、その子は砂と対話をしているのではないかと思いました。

そして、数人でダイナミックに展開する遊びの中では、役割分担など協力しあいながら遊ぶ姿も見られます。仲間関係においては、他の遊びと比べると子ども同士の言葉での会話が少ないと言われていますが、子どもたちを見ていると、お互いの動きを模倣しあって取り入れたり、砂の形の変化、砂に関わる動きを介して、お互いの思いを感じとったりいるようです。砂の状態や変化に応じて、遊びの展開やテーマが共有されていくという特徴もあるとも言われており、砂場独自の子ども同士の対話の仕方があるように思います。

今回は、砂場の歴史や特徴についてお話をしました。子どもの遊びの充実を願って作られた場所だからこそ、いまだに子どもにとって魅力的な場所であり続けているように思います。次回は実際に子どもたちがどのような遊びをしているのか、またそこでどのようなことが育っているのかということを考えてみたいと思います。

夢をかなえて

認定こども園
こども広場あんり
林　千絢

私が保育教諭として働き始めてから、早いものでもう一年が経とうとしています。振り返るとあっという間だったように感じますが、毎日ただ必死で、とてつもなく長い時間を過ごしていたように思います。

イルカの飼育員・パティシエ・母のようなお母さんなど、幼い頃に夢見た将来はたくさんありました。しかし、いつからか「子どもとかかわる仕事をする」という夢が強く心に残るようになり、私は念願の保育教諭となりました。お世話になった先生方に再会し、憧れ、一緒に働きたいと目指した道ですが、想像と現実の違いに悩んだり、声掛けや保育内容が子どもにどんな影響を与えているのか、すぐには結果が出ない日々でした。自分の保育に自信が持てずくじけそうになったり、自分の器や持っているものの小ささに嫌気がさすことばかりでした。それでも、四月から今日まで周りの先輩の先生や友人の支えと優しさに助けられながら、保育をしてくることができました。助けに甘えたり、助けていただいたことに気づかず過ごしてしまったりの一年でしたが、日々学びを増やし、職員同士助け合うことができるようになりたいと思います。

「子どもの自主性・主体性を尊重する」と学生の時に学び、四月は日々の保育で子ども達の声を聴き、尊重していきたいと思っていました。しかし上手くいかないこと、思い描いたように話せないこと、何度も同じところでつまずき自分が嫌いになりそうでした。そんな時に私を支えてくれたのは子ども達でした。私が落ち込んでいても楽しくても毎日笑顔を見せてくれ、楽しかったことなどを話しに来てくれる姿に助けられることが多かったです。自分が「せんせい」と呼ばれることに違和感しか感じなかった一学期。たくさんの行事があった二学期。次年度に向けて動く三学期。まだまだ上手くいかないことばかりの毎日ですが、子ども達の笑顔を守っていけるようになりたいです。

先輩の先生方の保育への姿勢や考え方など、これからも真似させていただいたり、質問させていただき様々な保育の学びを深め、これからの自分の保育に生かしていきたいと思います。そして、子ども達が大きくなって園生活を思い出した時に、笑顔の素敵な大好きな先生だったと言ってもらえるような先生を目指していきたいと思います。

子ども達と共に

認定こども園
東海大学付属静岡翔洋幼稚園
堀　瑞枝

私が幼稚園教諭になって10ヶ月が経ちました。幼稚園教諭として迎えた初めての春は、これから幼稚園教諭としての生活が始まっていくことへの希望や期待を持つ反面、不安と緊張もありました。クラス発表の日、私は予想もしていなかった年長の担任になり、私に年長の担任が務まるのかという不安が大きくなりました。

日々、保育・教育を進めるにあたって困ってしまうことや教材研究など、悩みがたくさんあります。特に子どもへの言葉かけは難しいです。場面によっても子ども一人ひとりの姿によっても変わります。一学期は、毎日の活動をこなし一日を乗り切ることに精一杯だった私にとって、子どもの思いをくみとって言葉をかけることが出来ませんでした。

しかし、悩んでしまったときは、先輩の先生方が親身になり一緒に考えてくれます。いただいたアドバイスは、早速次の日の保育・教育の中で実践します。私にとって先輩の一言一言が学びです。自分にはなかった視点からのアドバイスが、私の考え方の幅を広げてくれます。そして子どもの気持ちになって考えたり、同じ目線で物事を考えたりすることの大切さを実感させてくれました。

今ではクラスの子ども一人ひとりの本質を見ることが出来るようになりました。「あの子に伝わりやすい言葉は何だろう」「今なんと言葉をかけたら聞いてくれるだろう」と考える余裕も出てきました。とはいえ，手探りの毎日です。適当な言葉をかけることは難しく、うまくいかずに悩んだり落ち込んだりすることはまだまだたくさんあります。その中でも、子どもの思いをくみとってあげるために、同じ目線に立って考えることを心がけています。

課題が絶えない日々ですが、それをチャンスだと思い、子ども達と一緒に私も成長していきたいと思っています。子どもにとって安心できる存在になれるように、子どもに寄り添うことを忘れず、これからも過ごしていきたいです。学んだことは素直に吸収し、努力することを忘れずにこれからも頑張ります。

先輩方の力も借りながら、

変わるってステキ！

認定こども園
須津幼稚園
久松 美都子

「幼稚園の先生になりたい」そう思ったのは、私が幼稚園に通っていた時の〝先生が大好き〟だったからです。

念願かなって幼稚園の先生になったとき「せんせい」と呼ばれることが嬉しくて、子ども達の笑顔がかわいくて、私のことを頼りにしてくれていると思うと『幼稚園の先生が大好き』から『子どもが大好き』に変わりました。

しかし、毎日楽しいことばかりではありません。子ども達がけんかをすれば「どうすればいいの？」と私も困ってしまいました。保育がうまくいかずに悩む日が続くこともありました。そんな時、相談に乗ってくれたのは同僚や上司です。話を聞いてもらったり、アドバイスをしてもらったりしました。ホッとすると同時に『辞めたい』から『頑張ろう』という気持ちに何度も変わりました。

子ども達も、私や友達のちょっとした言葉かけやまなざしで、『できない』から『できた』へ、『わからない』から『わかった』へ、『遊ばない』から『遊ぼう』へ、『いやだ』から『やってみよう』へと変わっていきました。

〝変わる〟ということは成長すること。心や身体が成長していく姿を、そばで見たり感じたりすることができるなんて、なんて素晴らしいことでしょう。そんな経験をさせてもらえる仕事を選んで本当によかったです。

幼稚園の先生になって二十数年たちますが、これからも子ども達が成長していく姿を見守り、私自身も教師として成長し続けていきたいと思います。明るい笑顔を忘れずに、子ども達一人ひとりの気持ちに寄り添いながら・・・。

今、思うこと・・・

弘香幼稚園
東 史子

縁あって母園の教諭となり16年が経とうとしています。

当園は小規模園ということもあり各学年1クラス、家庭的な雰囲気の中で子ども達も職員も学年の枠を超えて毎日楽しく過ごしています。新任の頃は、分からない事ばかりで2人の先輩の先生に助けて頂きながら日々奮闘していました。その2人の先輩が3月で退職され、2年目を迎えた4月に2人の新任の先生が加わりました。まだまだ未熟で充分な事も出来ない私でしたが、先輩になり時には後輩にアドバイスをする立場になった事には大変困惑した事を今でも鮮明に覚えています。園長先生、副園長先生をはじめ経験豊かな先生に相談しながら、今日まで振り返る余裕もなくあっという間に過ぎてしまいました。

そんな中、昨年度外国籍の兄弟（兄K君・弟M君）が12月より入園し、私は兄を受け持つ事になりました。他園でも珍しくないかと思いますが、当園では初めてのことでした。家庭内での会話は母国語の為、当初は上手くコミュニケーションが取れず様々な葛藤がありました。少しでもK君の思いを理解してあげたい、また集団生活をする上での基本的生活習慣やルールを身につけてほしいという思いから、本を購入し参考にしながら関わりあってきました。しかし、4か月という短い期間でしたので充分な事も出来ず不安を抱えたまま卒園を迎え、私としてはとても悔いが残りました。そして、今年度はM君が年長に進級し受け持っています。1対1での関わりや、身振り手振りを交えてゆっくりと伝える事を心掛けています。子ども達の間でも自然に優しく接したり助けてあげる思いやりの心が芽生え、私としても嬉しく思います。現在は、園生活や日本語にも大分慣れM君自身も積極的に友達と関わろうとする姿があり、1年で大変成長し生き生きと生活しています。やはり、子どもの成長はこの仕事に就いている限り、どんな事にも代え難い喜びだと改めて実感しています。様々な経験や失敗を乗り越えて今がある事、また家族や周囲の支えがあり長く勤めることが出来ていることに深く感謝して、これからも努力していきたいと思います。

娘の成長

双葉幼稚園父母会会長
稲　淳

「給食が食べきれない」だから幼稚園に行くのが嫌だ!と泣きながら帰ってきた娘も、この春卒園。

この3年間、「一口でいいから食べよう」「次はこれ完食できるかな?」と先生が根気よく付き合ってくれたおかげで、今では給食を完食できるようになりました。

そんな娘は、先天性縮毛症という症患のため、他の女の子と髪の毛が少し異なり、ふわふわアフロの髪の毛です。入園当初、綿あめのようなその髪の毛はさわり心地が良いので、お友達によく触られたようです。しかし、娘はその他の人と違う所(欠点)に触れられるのが嫌で、家で泣いたこともありました。

でも、先生がお友達に娘の気持ちを分かってもらえるよう指導して頂き、また娘へのケア及び娘の個性を伸ばすような教育をしていただいたおかげで、娘も自信を持ち楽しんで幼稚園生活を送る事が出来ました。

その娘が最近、縄跳び、ピアノ、折り紙等を一生懸命頑張っています。なぜ?と聞くと、先生たちが生活発表会の準備で夕方遅くまで頑張っている姿を見てカッコ良かったので、私も幼稚園の先生になりたいとのこと。そのためには「ピアノや折り紙などいろんな事が出来ないとダメだから頑張る!」と言いました。

3年間自分たちの指導をしてくれる先生の背中を身近で見ていて抱いた夢だと思います。

この三年間を思い返すと、園生活についていくのが必死だった年少から、年中では逆上がりや縄跳びなど色々なことを覚え、年長になり、自発的に行動し夢や目標を持つことができるようになっていました。

3年間幼稚園で生活する中で、身体的にも精神的にもかなり大きく成長した娘を見ることが出来ました。そして何より幼稚園に楽しんで行ってくれたのが良かったです。そんな幼稚園生活もあと少し。次の小学校生活もまた、充実したものになれば良いと思っています。

親子の絆

富士宮聖母幼稚園聖母会会長
福井治美

ちょうど10年前、仕事三昧の日々を送っていた中で息子を授かり、その3年半後に娘にも恵まれました。年齢的に遅い出産であったので、あらゆる神様に感謝した事を覚えています。人生で最も素晴らしく、「責任」を意識した出来事となりました。

生まれた時には、無事に育ってくれることだけを願っていたはずなのに…成長と共にあれもこれも出来て欲しいと期待を持ちすぎてしまう事が多くなっていました。その度、子ども達は嫌な思いをしてきたと思います。ただ、幸いな事に色々なタイミングで幼稚園の神父様や先生、先輩お母さんのお話を聞いては、行き過ぎの期待や親の押し付けは駄目!とハッと気付いては反省をしてきました。

そんなことを繰り返しては、親に不信感を抱くだけでなく、自信を持てない子になってしまうと思い、何があってもお母さんはいつでも味方よ!と分かるよう、しっかりと安心させてあげる為に子ども達を以前にも増して抱きしめるようにしました。

年長の娘は、寂しさや不安、悪い事をしてしまったけれど素直に謝れない時など…。私は、褒めたり愛おしく思ったり、上手く叱る事が出来ず反省している時など…お互いどちらからともなく「ぎゅっ!しよう」と言っては、抱きしめっこをしています。抱きしめるだけで気持ちが安定するのか、思っていた事を伝えてくれ、私の話も素直に聞けるようになりました。

3年生の息子は、まだまだ甘えたい反面、お兄ちゃんとしてのプライドや恥ずかしさもあるので、娘よりはスキンシップも少なめです。徐々に自分の世界を作り始めてもいますが、抱きしめられる事で自分に自信を持ち、不安な事も吹き飛ぶそうです。

私の意識を少し変えただけで子ども達も変わりました。気持ちを伝えてくれるまでじっくりと待つことも大切でした。穏やかに「親子の絆=信頼関係」を作っていけているような気がします。

子どもと過ごせる濃密な時間に限りがあると思えば思うほど…子ども達の意思と力を信じ、迷う事なく丸ごと受け止め、無条件の愛情を注いでいきたいと思います。

街ぶらり

熱海地区

◆熱海トリックアート迷宮館

視界のマジックとも言われるトリックアートは、専門の画家の方々が人間の錯覚を利用して、平面をあたかも立体的なものに見せてしまう不思議で楽しいアート作品です。熱海トリックアート迷宮館は熱海城敷地内に隣接された娯楽施設で、トリックアートを約50点展示しております。館内は、みて・さわって遊べる体験型の美術館となっており、カメラを使って撮影などするとより一層楽しむ事ができます。

また館内係員の方が丁寧に説明してくださり、カメラの撮り方やコツ等を教えて頂けるなど館内サービスも充実しています。色々なポーズに挑戦し自分だけの作品を完成させてみても面白いです。売店では展示されたトリックアートが載せてある本や、トリックアートを簡単に作って遊べる本なども販売しているなど充実した施設となっています。家族、友人、カップル等誰と来ても楽しい体験が出来る場所です。

商店街

◆熱海城

熱海城は、錦ケ浦山頂にある観光施設となっており、城郭自体は歴史的に存在したものではありません。1959年に海抜100mの位置に建てられ、外観5重、内部9階の日本の城郭に見られる天守を模して造られた鉄筋コンクリート造建築であり、天守閣風建築物です。浅野祥雲作による金鯱を戴く天守からは、熱海市街・初島・大島・相模灘を一望することができます。城内の各階には絶景パノラマ展望天守閣・日本城郭資料館・武家文化資料館・仮装写真館「鹿鳴館」・浮世絵美術館等があり、また展望足湯や無料ゲームセンター等、子ども連れでも楽しめる施設にもなっております。

春には桜まつりが開催されたり、定期的に猿回しイベントが行われる等年間を通して楽しむ事が出来ます。熱海に来たら一度行ってみては如何でしょうか？

◆熱海駅前商店街

熱海駅前には、仲見世商店街と平和通り商店街の2つの商店街があり、創業60年から70年といった老舗店もあります。ショッピングモールとはちがい、個性的で小さな店が集まっていて日本独特のショッピングが体験できます。レストラン・カフェ・すし屋・干物屋はもちろん、伊豆半島の土産が勢ぞろいのお土産屋さんもあります。温泉まんじゅうをつまみながら、そぞろ歩きもおすすめです。旅の始まりや帰りにはここでショッピングを楽しみ、お土産を買って帰りましょう。

熱海と言えば温泉街というイメージが強い街かと思いますが、トリックアート迷宮館や熱海城、熱海駅前商店街の他にも、MOA美術館・来宮神社・熱海梅園といった史跡や公園、博物館が多くあります。

また熱海海上花火大会が年1回ではなく各季節ごとに開催されるなど、様々な楽しみ方が出来ます。

熱海に来た際は温泉でゆっくりして、熱海の街を色々と廻ってみるのも良いかもしれません。

ぶらり

みなさんのおすすめの場所やお店があったら広報委員までお知らせください

食品と食物

上野幼稚園
吉野友勝

簡単・便利

終戦から10数年たった昭和30年代、日本は戦後の復興にともなって経済が大きく発展し始めました。その頃から加工食品やインスタント食品が製造されるようになりました。現在とは比較にならない種類とレベルですが、日本人の食事習慣が大きく変化していく出発点になりました。簡単で便利なものは、すぐに多くの人に利用されるようになり、次々に新しい商品が出回り始めました。冷蔵庫も発達し、誰もが買えるようになってくると冷凍食品も現れ、簡単で便利な生活が一般化していきます。冷凍食品はいつでも食べられるので季節がなくなります。簡単・便利は安易な生活を生み、安易な生活は安易な考えを生みます。手作り・自然・無添加・オーガニックと聞くと何か特別なもののように感じます。昔は普通のことでした。工場生産された食品という商品に囲まれているからでしょうか。ある料理学校の先生が「私幼時報」の中で次のように述べていました。

「昭和30年代日本が経済成長し始めた頃から、便利な調理済の食品やインスタント物の多用で食事内容が画一化されて変化に欠け、栄養の偏りが見られます。現在調理済み加工食品の利用割合は70％。食事は人をつくります。安い・簡単・便利に流され特定のものばかりは安易な考えを生み、人間関係や視野も狭く、自己中心的に。逆に手をかけ変化に富んだ食事は、五感が発達し視野も広がり、他人のことも考えられる思いやりの心が芽生えます。幼児は初めての味は安全に対する本能的防御反応で吐き出したり、食べようとしません。母親が工夫し手を加え根気よく食べさせるから、味を覚え味覚が発達します。味覚の幅は人間の幅に通じます。」

食事は自分の体を造ると同時に、日常生活のエネルギーでもあります。生活に密着したものですから生活の仕方や考え方も左右します。簡単・便利を求めるのは自然な欲求であり、全て悪いとは思いませんが、命と健康の源である飲食物には注意が必要だと思います。

病原菌や毒物を含む物なら影響はすぐに現れますが、そうでない物は影響は徐々に。大きな結果にも明確な原因は定かでなくなります。だから生活習慣病というのかもしれません。

簡単・便利を支える物

私たちの食が簡単で便利で豊かになり、奇抜な商品も現れて楽しませてくれるのには、科学技術の発達が欠かせません。化学と言っても良いかもしれません。人類はこれまで10万種類以上の化学物質を生み出してきたと言われます。大半が地球環境と人体にとって経験のない物です。でもそれらのお蔭で、豊富な簡単で便利な食品を楽しめるようになりました。食品には何種類位使われているのでしょう。手元の古い資料ですが、平成10年現在で天然由来を含め１３５０種が法律で認められています。勿論それぞれの使用量安全基準が定められています。一見問題なさそうですが、昔読んだ東京医科歯科大学の柳沢文徳教授の本に問題点が指摘されていました。それは、個々の安全基準はあっても同時に複数の添加物を体内に取り入れた場合の安全基準は定められていないのです。化学反応には、単純に足し算をする相加作用と相乗作用というかけ算があり、人間の消化酵素もからみ極めて複雑で、たった３種類の添加物でも人体にどのような影響を及ぼすかを解明するのは不可能であると述べていました。この警告から約50年、その間も多くの研究者が様々に食品添加物の危険性について発表しています。

元同志社大学生化学研究室の西岡一（はじめ）教授が講演や著書の中で次のように述べていました。

「もし無関心に飲食していれば、一日に約70種近くの添加物を食べています。重さにして約11g・年間4kgです。人体に異常が起きないわけがない。複雑な化学反応を考えれば因果関係の解明は不可能に近い。」

私が教師になった頃、アレルギーという言葉はほとんど耳にしませんでした。2・3年すると当り前になり、退職する頃にはアナフィラキシーに発展していました。癌は4人に1人くらいだったのが今は2人に1人。明確な因果関係の証明は不可能という研究者の言葉が重く響きます。でも豊かで安い・簡単・便利で楽しいが一番ですよね。食品衛生法では原材料表示が義務付けられています。賢い消費者になって表示を見て買う習慣を身に付けたらどうでしょう。使用量の多い順に表示されています。自分の家の台所にない物は極力避けるべきでしょう。人体には経験のない異物ですから。

花粉症・食物アレルギー等の話題は多いが、冷静に考えれば自分を異物から守る免疫機能が、花粉や普通の食物を異物と見なし自分を苦しめる。免疫機能の暴走という異常ではないのでしょうか。赤信号みんなで渡れば恐くない。でも赤信号に変わりはないですよね。

広報委員回想録

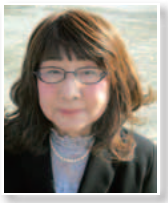
これまで広報委員会委員として、教員養成機関との意見交換会開催や広報誌作成などに携わってきた中で、各委員の感じたことや想い出を綴っていただきました。

後列左から　横山委員、今村委員、稲葉委員、山本委員
前列左から　佐々木副委員長、後藤委員長、杉山副委員長

青山委員

吉野副委員長

山口委員



小西委員

■私は長年にわたり広報委員を務めてきましたが、今期の広報委員の皆さんはバラエティーに富んでいて笑顔が絶えない中にも建設的な意見がたくさん出て楽しく充実した編集委員会になりました。「もの想い」に投稿してくださったPTA会長様、保護者会会長様、そして「コミュニティ保育の窓」に投稿してくださった先生方に心より感謝申し上げます。

■辞典を広げ難しい顔をしたり、談笑したり、編集会議は多くの先生と知り合う楽しい時間。「街ぶらり」は地域を知る機会、会議後の夜ぶらりは親睦の時間でした。

■各地区で開催されている「子育てフェア」、「保育の窓」を通して新任・経験を重ねた先生方の声など、記事の校正を通して幼児教育に懸ける熱い思いが伝わってきました。原稿依頼・取材資料作り等多くの作業がありましたが、良きメンバーに恵まれて年3回の発行計画を無事に終了することができたアッという間の2年間でした。

■毎年夏に開催される初任者の宿泊研修を取材しました。社会人としてのマナーを学ぶ研修から幼稚園ですぐに実践できるような実技研修まで、幅広い分野の研修が行われていました。どの先生方も真剣に研修を受けていたことが印象に残っています。これからの私立幼稚園の教育を担う先生方の真剣な姿に、私たちも初心を忘れず日々努力していかなければいけないと思いました。

■「静私幼だより」に寄稿された原稿を校正させていただく作業は、句読点の位置やカッコの有無で意味が変わってしまったり、文章が読みやすくなったりと言葉の使い方の難しさ、面白さを改めて学ぶことができました。自園発行のお便りを保護者に伝わりやすくするための勉強になり、とても有意義な作業でした。

■「静私幼だより」に掲載される「街ぶらり」の取材として、沼津・三島地区と熱海地区の取材担当をさせて頂きました。その街の魅力を伝えるという重荷を抱えながらも、多くある観光スポットを探し選び工程を作り上げる作業はとても楽しくやらせて頂きました。他の委員の方々には多々ご迷惑をお掛けしましたが、自分自身とても良い経験をさせて頂きました。ありがとうございました。

■残念ながら任期の途中で体調を崩し、他の委員の先生方や事務局の皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまいました。しかし、広報委員として携わった仕事はどれもとても勉強になりましたし、楽しいものでした。中でも印象に残っているのは「街ぶらり」のお仕事です。田子の浦港の取材は和気藹々として笑いが絶えず、今でも時々思い出したりします。2年間、仲良くしてくださった委員の皆さんに、この場をお借りして篤くお礼申し上げます。

■句読点等々、いっぱい勉強させていただきました。広報委員会活動は楽しいことばかりでしたが、中でも活動後の都度に行われた自由参加の懇親会（飲み会?）や「街ぶらり」の取材でした。どれも良い思い出となりました。ありがとうございました。

「静私幼だより」では寄稿依頼で各園の皆様にご迷惑をお掛けいたしましたが、快く引き受けて下さり大変感謝しております。

■認定こども園訪問・養成校訪問や意見交換会などに広報委員として携わることができ、自分達の園だけでは知ることができない多くの現場の声を知る事ができました。

また、委員会後に開かれた毎回の懇親会も楽しい思い出です。2年間ありがとうございました。

■「街ぶらり」での新しい発見、5月の養成校訪問、7月の養成校との意見交換会でそれぞれの養成校の特色や学生さんの思いを知ることが出来とても良かったです。

また、「静私幼だより」の校正等で委員の方々に会うのがとても楽しみでした。「静私幼だより」は各園に配布のみではなく全保護者の皆さんに読んで貰いたいと思います。

■懇親会では、各園の園長先生達とざっくばらんに情報交換や相談などをする事ができました。保育についてや保護者への対応などの様々な実情がわかり参考になりました。

また、広報委員会だけでなく県の研修や総会などで会った時でも、いろいろとお話しができ嬉しかったです。

1年間の ナイスショット特集

今日はとってもいい天気

おおきなきゅうり とれたよ！

きれいなおはなだね

ゴール目指して一直線！

オラフの鼻を食べちゃうぞ～！

見て見て、そっくりに描けたでしょ！

もうすぐ卒園で～す

どろんこあそび たのしいな

おとうさん！パンを取ったよ～！

長縄跳びにチャレンジ！みんなで７回跳べたよ！

ちょっとちょっと押さないでよ〜！そんなに乗れないよ〜！

こいのぼりも一緒に写りたいって！
青空・青いこのぼり・青い帽子で、
ハイポーズ！

ぼくらのツインハウス

葉っぱのおふとん、気持ちいい！

ふわふわ みのむしになったよ〜！

好き嫌いなくなんでも
食べられるようになったよ！
おいしいなぁ！！

はい、決めポーズ！

こねこのしーにゃん

藤枝北高校のおにいさんおねえさんと、
さつまいもを掘ったよ。
大きいおいもでびっくり！
友達と大きさをくらべっこしたよ。

芝の上をゴローン！

静私幼だより
NO.182
2018.03.15

ナイスショット

スカイジムに登ったよ。
富士山とどっちが高いかな?

かわいい鬼になりました

みて、みて、こんなに大きな氷だよ!

みんなでソリ遊び!!

世界で一つだけの
自分で編んだマフラーで〜す!!

木によじ登って…キウイ狩り

よいしょ! よいしょ!
おいしいお餅になるよ。

「鬼」のあとの「福の神」にホッ

バランス良く乗れたよ

宇宙に向って出発!

【編集後記】　平成29年度もあっという間に1年が過ぎ3月になりました。4月になると新しいお友達が入園し、年少さんは年中さんへ、年中さんは年長さんへ、そして年長さんはいよいよ小学生へとなります。春・夏・秋・冬と季節を移り替わりながら1年間を過ごす中で子ども達は、私たちの想像以上の成長を見せてくれました。お友達や先生だけではなく地域住民の方々と触れ合い、また沢山の行事を経験する事で、子ども達1人ひとりが成長していく姿を見せて頂き我々は日々感動するばかりです。教育者として今後学年が変わっても子ども達が更なる成長していく姿を見守り、少しでも手助けが出来ればと思っております。

広報委員 / 双葉幼稚園　横山政俊

（表紙写真／しらゆりこども園）

発行人／千葉　一道
編集人／後藤　正章
広報委員会

発行所／(一社)静岡県私立幼稚園振興協会
〒420-0853
静岡市葵区追手町9番26号
静岡県私学会館内
TEL.054(254)6820・FAX.(255)3694

http://www.shizushiyou.or.jp/
E mail: office@shizushiyou.or.jp

印刷／(株)三創　レイアウト・イラスト　村松麗子

このQRコードを携帯電話の「QRコードリーダー」で読み込めば、協会HPの携帯サイトにそのままアクセスできます。